Bystander @ Borderline

R*620

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｂｙｓｔａｎｄｅｒ　＠　Ｂｏｒｄｅｒｌｉｎｅ

【Ｎコード】
Ｎ８２１４Ｚ

【作者名】
Ｒ＊６２０

【あらすじ】
顔だけ優良男とゆるゆるドンマイ女のよくある凸凹コンビが固定主人公のホラー探偵もの。基本的に１タイトル１完結で連載。内容は都市伝説や怪談、日常生活で面白いと感じたものなどをベースにしたホラー…になるはず。プロローグのあとは時系列がバラバラになるのでご注意を。

プロローグ

大学進学のために東京に上京してきて三ヶ月が過ぎた。
新しい生活にも慣れはじめ、不安要素だらけだった一人暮らしも板に付いてきた頃だ。
初めて東京に来たときに感じた春の気配は薄れ、空気に夏の匂いが混ざり始めた。

３限目の授業を終えた私の足は一ヶ月程前から始めたバイト先に向かっている。
このバイトというのはとある探偵事務所の事務で、『探偵事務所でバイトとか…ちょっとかっこよくない？』という安易な理由から特に深く考えずにノリで決めてしまったのだ。自宅の最寄り駅から二駅の所にあるし、給料もそこそこだし、多少こき使われてはいるものの今のところ不満はない。

事務所は大通りから少し外れたところにある。
狭い道を足早に歩いていると首や額にうっすらと汗が滲み始め、本格的な夏の到来が近いのを感じる。暑さに弱い私にはそれが嫌で嫌で仕方ないのだが、今からそんなことを言っていてもしょうがない。
相変わらずのスピードで足を動かしていると、事務所のあるビルが見えてきた。
ビルと言っても都会に多い高層ビルとかではなく、老朽化が進んでいそうな裏路地にあるひっそりとしたビルだ。
一階は小さなカフェになっており、他の階には営業してるんだかしてないんだか分からない床屋やら何をしているのか分からない事務所などが入っている。今まで経営者らしき人もお客らしき人も見かけたことはないが。

カフェの横にあるコンクリート造りの細い階段を上り事務所の扉を開けると、いつものように所長である成澤さんが書類を見ながら眉間にしわを寄せて座っていた。こんな小さい事務所だが、意外と依頼数は多い。

「こんにちは。」
私が声をかけると成澤さんは書類から少し顔をあげて返事をする。いつも通り。
そのあと私は成澤さんに紅茶をいれ、自分のデスクに着くと書類の整理を始める。これまたいつも通り。
ここでのバイトはひかれた線の上を歩くように決まったことを淡々とこなすだけであり、事務所に入ってから出るまで、私はきっちり外れることなくその線の上を歩くのである。
今までも、これからも。
私はそう思っていた。

まさに今日、その線が大きく歪み始めるとはその時の私には想像もつかなかった。

突然ふと思い出したように成澤さんが声を上げた。
「藤代くん、もうすぐ人が来るから準備をしてくれるかい。」
「分かりました。」
“客”ではなく“人”という言い回しに微妙に違和感を覚えたが、特に気にせずテーブルの準備をしようと立ち上がった。すると、成澤さんがさらに言葉を続ける。
「それで、その人がきたら君を含めて話がしたいんだ。大事な話が

ある。」

驚いた。それと同時におかしいと思った。
只のバイトである私が所長とその来客の話に混ざるなんてどう考えてもおかしい。
一応「分かりました」とは返事したものの、私の心に疑念が浮かぶ。
きっと何かあるに違いない。
もしかしたらクビにされるのかも…そんな考えが頭をよぎる。
もうすぐ来るであろう客を『ここで新しく働いてもらうことになった子だよ。君はもう明日から来なくて良いから』とか何とか紹介されたらどうしよう。すぐ新しいバイトを探さないと今月の生活費が…

そんなことをもんもんと考えていると、突然来客を告げるチャイムが鳴った。
緊張がピークに達し、心臓がバクバク鳴っている。
成澤さんが立ちあがってドアに向かう気配がし、背後でドアの開く音がした。一瞬、暖かな風が部屋の中に吹き込み私の髪を揺らした。

「遅いぞ、柊佑くん」
成澤さんが開口一番、怒ったように声をかけると「すいません。ま、良いじゃないですか」とまったく謝罪になっていない返事が聞こえた。声は若い。
これは本当に新しいバイトかもしれないぞとじわじわと心に絶望感が広がっていく。あぁ…生活費…

「藤代くん、お茶をいれたらこっちに来てくれるかい。」
背後から成澤さんの声がする。
「はい」とだけ返事をすると緊張からか多少汗ばんできている手でいそいそとポットにお湯を注ぐ。

『柊佑くん』。成澤さんは確かにそう呼んだ。
こっちは一ヶ月もここにいて未だに名字にくん付け状態なのに、随分親しいではないか。
短いバイトだったと半ば諦めを抱きつつ、いれたての紅茶を乗せた盆を持って成澤さんと柊佑さんとやらがいる所へ急ぐ。

柊佑さんはテーブルを挟んで成澤さんの目の前に腰掛けていた。
私は緊張と絶望で顔も上げられないので腰から下しか見ることが出来ないが、白シャツにベージュのチノパンと随分シンプルな格好だ。

「ありがとう。さあ、ここに座って。」
成澤さんが自分の隣を指差して言ったのに従って、私は俯いたままその席に座った。居心地悪いことこの上ない。
私の斜め前で柊佑さんが紅茶を啜っている音が聞こえる。

ちょっとした沈黙のあと、成澤さんがやっと声をあげた。
「紹介しよう。こちら、ここで事務のバイトをしている藤代くんだ。」
成澤さんが私に手を向けながら言う。
二人の視線が自分の方に向いているのを感じ思わず身が縮こまったが、成澤さんは気にせず言葉を続ける。

「そして、こちらが」
新しいバイトか…！

「うちで雇っている探偵の一人の柊佑くんだ。」

は？

我が耳を疑った。探偵の一人？

思わずばっと顔を上げると、ぼーっと窓の外を眺めている柊佑さんの顔が目に入った。
その瞬間、私に衝撃が走る。

柊佑さんは声の通り、私より少し年上くらいの大学生風の男だった。
しかし、衝撃を受けたのはそこではない。

衝撃的だったのは、柊佑さんの顔だ。

切れ長の目にすっと通った鼻筋、形の良い唇、シャープな顎、下手したら私より白いかもしれない肌によく映えているサラサラの黒髪。
柊佑さんは美男子という言葉を擬人化したらまさにこんな感じだろう、何処に目を向けても文句なしのイケメンだったのだ。

あまりの衝撃に思わずその顔を凝視していると、ふとこっちをみた柊佑さんとガッチリ目が合ってしまった。
紅茶を飲もうとしていた私はドキッとした拍子にカップを傾けすぎてしまい、必要以上になだれ込んきた熱い紅茶で盛大に唇を火傷した。今の私絶対に涙目だ。

「それで、本題なんだが。」

唐突に成澤さんが話を切り出して私に身体を向けてきたので、私は涙目のまま身構えるように身をひいてしまう。

新しいバイトではないようなのでとりあえず一安心だが、この若い探偵とバイトの私を呼んで一体どうする気なのだろうか。

成澤さんが少し目を泳がせて言葉を選んでいるのを見ながら、静かに続きを待つ。

「藤代くん、君に柊佑くんの助手をお願いしたいんだ。」

は？

声には出なかったが自分の顔がそう言っているだろうことは分かった。

助手をお願いしたいって？まったくもって意味が分からない。

成澤さんはしばらく私の反応を見ていたが、意味が分からないと語っている私の顔を見て詳しい説明をしてくれた。

この男…柊佑さんとやらは、今まで見かけたことのない顔なのでそんなに頻繁に事務所に出入りしている訳ではないのかもしれないが、とりあえず成澤さんの事務所の仕事の末端を請け負っている人物であるらしい。

６０代も半ばを迎えつつある成澤さんと恐らく大学生であろうこの男の間に一体どのような縁が存在しているのか皆目検討もつかないが、問題はそこではない。

その請け負っている末端の仕事というのが大分まっとうな部分から外れている内容なのだ。

成澤さんの事務所では来た依頼は全て引き受けるのをモットーにしていて、もちろん殺人や窃盗など法に触れることは避けるなどの一

定のボーダーは設けているがどんなことでも大抵は引き受けている。
それだからこそ事務所の規模は大きくないが客からの評判は高いのだと私も認識している。
しかし、そこに一つ問題が生じてくる。
来るものを拒まずの仕事をしているうちに数はそれほど多くないがある一定の色を含んだ依頼が混ざるようになってきたのだ。

他の事務所では決して請け負ってもらえない依頼。

成澤さんはそれを『特殊依頼』と呼んでいた。

『一般常識から外れた何者かによって起こされる現象やまたはそれに準ずるものに関する依頼』だと濁した説明をされたが、それが霊的現象に関わるものであることは私でも容易に想像できた。
そのような依頼は事務所で雇っている一般の探偵に任せることが出来ない。
そこで事務所の末端が浮かび上がってくるのだ。
不定期にやってくる特殊依頼を第三者に流し内密に調査をさせる。
その第三者が柊佑さんだというのだ。

「近頃、特殊依頼の件数が増加の傾向にある。柊佑くんだけで捌くには無理があるくらいにね。そこで君に柊佑くんの助手をお願いしたいんだ。」成澤さんが言った。
引き受けたら面倒なことになる。私の第六感がそう告げている。

「どうして私に…」
こんなどこの馬の骨かも分からない男の助手をさせようとしているんですか、思わずそう続けそうになりながら言葉を濁して成澤さんに問い掛ける。
「この手の依頼について、他の探偵たちは第三者の存在は認識しているが実際に誰がその役目を担っているのかは分かっていない。いや、分からないようにしているんだ。柊佑くんの光ある未来のためにね。」
成澤さんはそう言ったが、私にはどうしてもそう思えず、それは暗にこの依頼の複雑さを示しているように感じた。
「しかし、それも依頼数が少ないからこそ出来たこと。このまま依頼数が増えれば効率も都合も悪い。内部に協力者がいた方が何かと便利だと思ってね。」
成澤さんの言葉に一応納得はしたものの、やはり何処か腑に落ちない。
「それって別に助手にまでならなくても良いんじゃないですか？私何の役に立ちませんし。というか、むしろ邪魔になるだけだと思うんですが。」
慎重に言葉を選びながらそう言うと、成澤さんの目がきらりと光り「そんなことはない、なんせ柊佑くん自身のご指名だからね」と言った。
どういうことだ。
私たちは今日初めて顔を合わせたはずだ。それなのに何故私を知っている？何故私を選ぶ？

「アンタの後ろに怒り狂った男が見える」

訪れた静寂の中で突然柊佑さんが声をあげた。
さっきまで窓の外に向けていた視線は今は真っ直ぐに私をとらえている。

私はチラッと後ろを見て「冗談やめてください」といかにも怖がっているように言った。
勿論背後には何もいない。
「冗談なんかじゃない。なんかすんげー怒ってるけど何したのアンタ？」
嘘だ。何もいない。
「だからやめてください。何もいないじゃないですか！」
いる訳がない。
「いるんだって。」
いる訳がないのだ。

「ていうかアンタさ、なんでいないって言い切れんの？」
「だって私に見えない…！」
ここでハッと口を閉じた。まずい。
改めて目の前の男を見ると、形の良い唇の端を不愉快な角度に吊り上げて笑っている。

「そうだ。そんな男どこにもいない。何故ならアンタに見えないから。」

「つまり、いればアンタにも見えるはずなんだ。」

やってしまった、私は下唇を噛んで男を睨みつけた。
男は可笑しそうにさらに唇を歪めながら「ま、そういうことだ」と言って紅茶を啜った。

成り行きを見守っていた成澤さんがすかさず「引き受けてくれるね？」と聞いてくる。
私はさらに下唇を強く噛んだ。

もうこういうことには関わらないと決めたのに…

「ついでに言っておくと、」成澤さんの目が怪しげな光を放つ。

「断ってくれても結構だが、私は事務所の最重要秘密事項を君に話した。それがどういうことか、分かっているね？」

嫌な汗が背中を一筋流れた。

私が無言の重圧に耐え切れず首を縦に振ったあと、色々な説明を受け色々な書類を書かされ、事務所を出る頃には辺りはすっかり暗くなっていた。

「私はまだ仕事があるから、君たちは先に帰りなさい。」
成澤さんの言葉に黙って頭を下げると、さっさと歩きだす。
頭の中がぐちゃぐちゃだ。とにかく早く家に帰りたい。
しかし、まだ3歩も歩いていないうちに後ろから再び声が掛かった。

「時間も遅いし女の子一人じゃ危ないから、柊佑くん、藤代くんを送ってあげなさい。」

神様だがなんだが知らないが、どうやら私をただで帰す気はないようだ。

「はあ」
無意識にため息が出る。

結局引き受けてしまった。
成澤さんは冗談で言ったつもりだろうが、あの時の私の頭の中では危険を察知した警鐘が猛烈な音を立てて響き渡っていたのだ。
私の第六感はよく当たる。こういう時は従っておいた方が無難なのだ。

「はあ…」
「そんなにため息つくなって。幸せ逃げんぞー。」

横から呑気な声が聞こえる。

「良いですよ別に。どんどん逃げれば良いんだそんなもの。」
「まあそう拗ねんなよ。」
クックッという押し殺した笑い声が私をさらに落ち込ませる。この感じ、完全にガキ扱いされている。

そもそもこいつの助手になってしまった時点で幸せなんかなかったのだ。
逃げるものもないのだからため息ぐらい勝手につかせてほしい。

私が黙って俯いていると、急に柊佑さんが「先輩としてアンタに一

つアドバイスをしてやるよ」と言い出した。

「同情するな。」

はっと足を止める。

どこかで聞いたことがある気がした。

ずっと昔、どこかで。

私の立ち止まった場所から数歩先で振り返った柊佑さんの顔には緩やかな笑みが浮かんでいる。

暖かい春の風が黒い髪を柔らかく揺らしていった。

『どんなときも、例えば交通事故現場のそばを通るときも、決して同情してはいけないよ。』

頭の中に懐かしい声が響く。

『霊たちは生者のそういう一瞬の心の弱さを見逃さない。利用して入り込んでくるからね。』

分かってる。大丈夫。

「同情してはいけない。入り込まれてしまうから。」

私がそう続けると柊佑さんはゆっくりと頷いた。

「ただの野次馬はありふれた日常の中では決して覗くことのできない生と死の境を興味本位で覗こうとする。そこに本当の意味での同情は存在しない。」

「ところが、死を覗き見ることを恐れる人間がいる。それは同時に心の何処で同情心を抱いているからだ。」

死を覗き見ることを恐れる人間。
見ているようで見ていない。見ていないようで見ている。そんな人間。

「でも、そのどちらでもない人間もいます。」

私が言うと柊佑さんは驚いた顔をした。

「私も貴方もただの傍観者に過ぎない。」
一瞬の強い風が二人の間を吹き抜けて行った。髪の毛が顔に当たって鬱陶しい。
「傍観者…か。確かにそうかもね。」
柊佑さんはゆっくり私の方に歩みを進めながら笑った。
「やっぱり俺の目は間違ってなかったな。なかなか面白いよ、アンタ。育てがいがありそうだ。」
柊佑さんがすっと右手を伸ばしてくる。
「俺の助手はなかなか骨が折れると思うけど、まあ頑張ってくれたまえ。ちなみに、俺のことは名前で呼べ。名字で呼ばれるの嫌いなんだ。それに、その方が早く親しくなれるだろ。」
そう言いながら形の良い唇の端を上げる。
一方的な口ぶりのその男は自信満々で私に手を差し出している。めんどうには関わりたくないのに。腹が立つ。
しかし、本当は分かっているのだ。
私が腹を立てているのは、心の何処かで期待をしている自分自身に対してだと。
私は彼の右手を取った。
そして、私の前にひかれていた線が大きく歪んだ。
ぐにゃぐにゃと折れ曲がり、何処に繋がっているのかも分からない。
それでも、私はその線の上を歩くことを決めたのだ。

「よろしくお願いします。柊佑さん。」

こいつの言いなりになるのは不本意だが、自分の気持ちには勝てない。

『同情してはいけないよ。』

もう一度あの声が聞こえた。懐かしさで胸がいっぱいになる。

大丈夫。私はいつでも傍観者でいるから。

「こちらこそよろしく。」

握った手に力が込められる。

「佑季ちゃん」

全身に鳥肌が立った。

「頼むから名字で呼んでください。」

「え」

こうして私はこいつ…柊佑さんの助手を務めることになった。

その他危険

暑かった8月が終わりやっぱり暑い9月が始まった。

私は今、涼を求めてやって来たお客に交じって某ファーストフード店にいる。

目の前には教習所のペーパーテスト対策の参考書。この夏休み中に免許を取るとやる気満々だった私の計画は『面倒臭い』という理由で8月中にサボりまくったおかげでおじゃんになりそうだ。

大学が始まってから行くのはそれこそ面倒臭いが、やはり免許は欲しい。

ということで心を入れ替えた私はハンバーガー1つとコーラのMを注文し、3時間ほど参考書に目を向け続けている。迷惑極まりない。

遅々として進まない参考書に溜め息をつきつつページを捲ると道路標識がズラズラと並んでいるページが目に入った。

これを全て覚えなくてはいけないと思うと涙が出る。

『車両進入禁止』や『駐車禁止』、『止まれ』なんていうのは普段から馴染みのあるものだが、『落石の恐れあり』だとか『横風注意』なんて見たことがない。本当に存在するのかこれ。

『自転車以外の軽車両通行止め』（自転車は通行できるが、荷車やリアカーは通行できない）に至ってはもはやネタなのではないかとさえ思ってしまう。今の時代荷車やリアカーなんてものを使う人はそうそういないだろう。

どうして本当に使われているかも疑われるような標識を覚えなきゃいけないんだ、只でさえ頭の容量少ないのに、と確実にイライラを募らせつつある私に追い打ちをかけるように横に置いてある携帯が『昼飯に食べたラーメンがクソ不味かった』という心からどうでも良い友人のメールを受信した。

このメールが決定打となり完全に集中力を切らした私はろくに進んでいない参考書をカバンに突っ込み店を後にしたのだった。

さっきまでエアコンによってこれでもかと冷やされた室内にいた体は、外の暑さを余計に感知しているようでいつも以上に暑い。
一人暮らしのアパートまではあと１０分ほどかかる。
首筋に纏わりつく汗を極力気にしないようにしながら無心で足を動かし続けた。

やっとのことで視界の端にアパートが見えてきた。

節約のためにクーラーの温度はそんなに下げられない。
帰ったらとりあえず麦茶をがぶ飲みしよう、あ、でもお腹壊すかも。
などと朦朧とし始めた頭で考えていたときに道路の脇に立っている物に目が留まった。

白いポールのてっぺんに付いた標識。

黄色のひし形に黒で『！』と書かれている。
この辺に住み始めて結構経つが、今まで気に留めたこともなかった。
しかし、まだほんの齧っただけとはいえ道路標識を勉強し始めたからだろうか、何故か無性に気になる。
意味は分からないし参考書に載っていたかも思い出せないが、他の標識とは異なりただ『！』という記号が書かれているだけの標識はどこか異質のように感じた。
辺りを見回してみても標識はそれだけしかない。しかも、道は比較的広いし見晴らしも良い。

こんな所に標識を立てる意味があるのだろうかと首を傾げながら横を通り過ぎ、歩き続ける。
アパートの門の前で何となく振り返ってみると、標識はさっきと同じ所に同じように立っていた。
黄色と黒という警戒色で彩られたひし形が灰色のコンクリートに覆われた道で灰色の塀に寄り添うようにして浮かんだ姿はどこか異様な光景だった。
私はもう一度標識を眺めてからアパートの階段を昇り始めた。

その夜、家に帰ったあと無心で麦茶をがぶ飲みし、さらに先日コンビニで買って忘れていたアイスを冷凍庫内に発見、ものの一分で咀嚼した私は案の定腹を壊し布団とトイレの行き来を繰り返していた。
こんなことになるならアイスなんて食べなきゃ良かった、と昼間の自分を恨めしく思いながら冷や汗をかいて布団に身を横たえていると枕元に置いていた携帯が震えだし、止まった。
ちらりと時計に目をやれば、深夜の2時を回ったところ。
こんな時間にこんなタイミングでメールをしてくる奴はろくな人間じゃない、と痛む腹を片手で押さえつつ携帯に手を伸ばしメールを開くと思った通りろくな奴じゃなかった。
しかも内容もろくなもんじゃない。
『この間貸したＤＶＤ返して。』
それを何故今送ってくる。今すぐ返せということか。

嫌な予感がして心なしか落ち着きつつあった腹がまた痛み始めた気がする。

私は携帯をパチンと閉じた。
シカトだ。こういうのはシカトするに限る。
携帯を脇に押しやると目を閉じて腹の痛みに耐える。
痛いには痛いがもうトイレに駆け込む必要はなさそうだ。

ほっと息をついたのも束の間、先程意識から追い出したばかりの携帯が私の背後でまた音を立て始めた。
ブーブーブーブーブーブー
今度はメールではなく電話のようで、バイブはいつまでたっても鳴り止まない。
あまりの鬱陶しさにシカトを決め込みたいところだったが、この携帯を鳴らしている主が出るまで鳴らすタイプの面倒臭い人間であることを思い出し、観念して通話ボタンを押したのだった。

「もしもし。」
「やっと出たな。俺だ。」
「知ってますよ。」
「メール見たか。」
「見ました。で、シカトしました。」
「DVD返せ。」
「今じゃなきゃ駄目なんですか？」
「今見たいんだ。今返せ。」
「私、一応女の子なんですけど。」
「だから？」
「いや、危ないでしょ、こんな夜中に一人で出歩いちゃ。」
「大丈夫だろ。」

何が大丈夫なんだこの非常識人間。

さらに、微かな抵抗の意を込めて『腹を壊している』と迫真の演技を交えつつ訴えてみた。

そんなことで折れてくれるような人じゃないことは百も承知だったが、やはり『大丈夫だろ。』の一言で一蹴された。

こうして私は渋々この真夜中に痛む腹を抱えつつＤＶＤを返しに行くことになったのである。

「じゃあ、コンビニ横の公園で。」

そう告げるとこちらの返事も聞かず一方的に電話は切られた。

しばらく茫然と突っ立っていたが、やがてのろのろとＤＶＤを探し始める。

あの人を待たせるとろくなことにならない、と私の第六感が告げている。

奇遇だ。私もそう思う。

積み上げた漫画の下からやっとのことでＤＶＤを見つけ出し、適当な袋に入れようとして何気なくタイトルを見る。

借りておきながら忘れていたが、映画館に来た女性客の半分を泣かせたと話題になったＲ１８のホラー映画だった。
泣きはしなかったが、かなり怖かったのを覚えている。
再び時計に目をやると、時刻は深夜２時１５分を少し過ぎたところ。
この時間にこのＤＶＤを見たくなるなんて流石あの人だと納得せざるを得ない。
私は尊敬とも呆れともいえる感情を抱きつつアパートの部屋を出た。

外に出るとすぐにじめっとした空気が身体に纏わりついてきたが、昼間よりは幾分ましな様に感じるし、風が吹けば額や首筋に滲んだ汗が冷やされ涼しいと感じることも出来た。

部屋に鍵をかけて足早に階段を下りる。
電話が切れてから１０分近くが経過しているので、ここは急いだ方が良さそうだ。

薄暗い道路に足を踏み出すと急に心細くなる。
元から人通りの少ない道である上にこの時間となれば通行人などいる筈も無く、寝静まった夜に一人分の足音がうるさく響いた。
点々と置かれた街灯も道全体を照らしてはくれない。
決して照らされることのない街灯と街灯の間には色濃い闇が横たわっており、その対比が一層不安感を煽るのだった。

少し行けば明るく、比較的通行量の多い道に出る、それまでの我慢だと自分に言い聞かせながら歩き始める。
考えまいとしてはいるが、無意識に手に持った袋に入っているＤＶＤのことを考えてしまう。

確か似た様なシーンがあった筈だ。
主人公が暗い夜道を一人で歩いている。
まっすぐ前だけを見て決して道の端には目を遣らない。見たくない物まで見えてしまいそうだから。
主人公が暗い夜道を歩いている。
荒い息使いと足音だけが耳に付く。
そうだ。ここで聴覚を巧みに利用した映像表現に感心したんだっけ。
主人公が暗い夜道を歩く。
ここでの歩調はもはや小走りと言った方が正しい気がする。
視界の先に明るく大きな通りがぼんやり見えてくる。
主人公にとっても見ているこっちにとってもほっと息つくような光景だった。
しかし、その後突然主人公は寒気に襲われ身体が動かなくなる。
そしてガタガタ震えながら横を見ると…

!?

考えながら無意識に横を見ていた私は突如現れた長細い影に肩を揺らした。

標識だった。

すっかり忘れていた昼間見たあの『!』と書かれた標識だ。
私はほっと息を吐き出すと同時にこんなものにビビッた自分に自嘲気味の笑みを浮かべた。

いくらＤＶＤのことを考えていたからとはいえこれは恥ずかしい、
誰にも見られなくて良かった…。

そう思ったときだった。

身体が動かなくなった。
手も足も首も。
いくら脳が動けと司令を出しても身体はそれに応えてくれない。
全身に鳥肌が立ちはじめる。
寒さが尋常じゃない。
涼しいなんてものじゃない。とにかく寒い。
キーンという耳鳴りが頭に響いてくらくらする。
胸を締め付けられたように息をするのが辛い。
息遣いが荒くなる。

ヤバい。
ヤバいヤバいヤバい。

本能がそう告げる。
暑さのせいでもなく腹痛のせいでもない汗が幾筋も額や背中をつたうのを感じる。

後ろだ。
後ろに何かいる。
何なのかは分からないが、少なくとも人間ではない“何か”が。
動けと脳が司令を出し身体もそれに従おうとするが、何かがそれを頑なに阻止しようとしている。

見えない大きな手が私の身体を押さえ付けようとしているかのように。

「おい。やめろ。」

霞んだ意識の中で耳が誰かの声をとらえた。
近くなのか遠くなのかも分からない。誰の声なのかも。
しかし、声を聞くと同時に私を押さえ付けていた力が急に消え身体が言う事をきくようになった。
頭がかち割れそうな位響いていた耳鳴りも消えた。
訳も分からず力が抜けた私はへなへなとその場に座り込んでしまった。

「大丈夫か。」
声の主が私の側にしゃがみ込む。

「柊佑さん…」

私をこんなに時間に呼びつけた張本人である。

私があまりに遅いので電話を切ったあとシカトして寝たんじゃないかと思いアパートに乗り込んでやろうと公園から歩いてきたそうだ。そこで立ったまま金縛りにあっている私を見つけたらしい。

柊佑さんの声を聞き、姿を確認すると自然と安堵のため息が出てくる。鳥肌も治まった。

しかし、それと同時に気が重くなるのを感じる。
道の真ん中で金縛りにあうなんてざらにあることではないので質問攻めにされるのは間違いない。
チラリと横に立っている人を窺うとジッと何かを見ている。
私が声をかけようとすると視線に気付いたかのようにこちらに顔を向け「行こうか」と一言言って私のアパートの方向へ歩き出した。

何故私のアパートに行こうとしているのかというもっともな疑問よりも何故何も聞かないのかという疑問の方が頭をもたげた。
道の真ん中で動けなくなっていたことに対してもう少し好奇心や興味を抱いても良いではないか。
ついさっきまでとは矛盾した気持ちを抱きながら私は前を歩く背中に声をかけた。

「何も聞かないんですか？」
「何を？」

質問を質問で返すとは。

「何って…さっきの…」

私が言葉を濁すと柊佑さんは「あぁ。そのこと」と言ってゆっくり振り返り真っ直ぐ道路の脇を指差した。
暗い目からは何の表情も読み取れないが口元は楽しげに歪んでいる。

「あれ、でしょ。」

アパートに着くと早速ＤＶＤを見ようとし始めた柊佑さんを遮ってさっきの言葉の意味を尋ねる。

彼が指差したのは標識だった。
黄色と黒の『！』の標識。さっきの金縛りと何の関係があるのだろうか。

柊佑さんは私の質問には答えず、「へぇ、お前免許取るのか」と言いながら床に落ちていた参考書を拾い上げた。昼間にマックで読んでいたあれだ。

「懐かしいな」なんて言いながら呑気にページをめくっている姿に

段々イライラが募り、「ちょっと聞いてるんですか」と言いながら参考書を取り上げようとした私をヒョイとかわした柊佑さんはあるページを掲げて見せた。

たくさんの道路標識が並んでいる。昼間見たページだ。

「これが、どうかしたんですか？」

尋ねると彼は面倒臭そうに「これ。」と言って『警戒標識』と名付けられたグループの中の一つの標識を指差した。

あの標識だ。

あの『！』の標識。

意味は

その他危険。

「この標識は補助標識と一緒に置かれることが普通で単体ではめったに使われない。

けどな、稀にあるんだ。単体が。」

さっきの標識には補助標識らしき物は付いていなかった。

これは何を意味するのか。私は生唾を飲み込み続きを待った。

「この標識の意味は『その他危険』だが、その中に“霊による”危険も含まれると言われている。
心霊スポットや原因不明の事故が多発している場所の周りにはコイツが単体で置かれていることが多い。」

参考書の標識を指でコツコツと叩きながら柊佑さんが言う。
背中に冷や汗がつたうのを感じた。
まさかそんな…いや、何かの間違いだ。偶然だ。こんなの。この汗だって腹痛が原因で…

「特に、見るからに危険の無さそうな、
例えば　見晴らしの良い広い道　なんかに不自然に置かれているような所には注意が必要らしい。」

目の前の人は楽しげに口元を歪めた。

「あそこみたいにな。」

私は絶対に夜あの道を通らないと誓った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8214z/

Bystander @ Borderline

2011年12月26日02時04分発行